

特集 2018年度大正大学宗教学会報告

大澤広嗣著『戦時下の日本仏教と南方地域』
合評会記録

(評 者)

小林惇道 高橋秀慧

(著 者)

大澤広嗣

(司 会)

寺田喜朗

大正大学宗教学会特別企画

『戦時下の日本仏教と南方地域』

(法蔵館、2015年12月)

合評会記録

開催日：2018年10月20日

寺田：本日は、大正大学大学院の出身で、現在は文化庁宗務課で活躍されている、大澤広嗣さんに来ていただきました。大澤さんは、2015年に『戦時下の日本仏教と南方地域』という大変な労作を書かれていて、既に『宗教研究』、『宗教と社会』、『日本史研究』、『仏教史学研究』でも書評がなされています。また、大澤さんは、その後に編著書や資料集の監修などもされていて、この本を出してからのご研究も多数あります。そこで、変則的な書評会にはなりますが、始めに著者の大澤さんから、本書公刊後の進捗も含めたコメントをいただいて、それから本学の高橋秀慧氏と小林惇道氏に本書の書評をしていただき、それから大澤さんにリプライをしていただいて、最後にフロアに開く形で全体討議をしていきたいと考えております。それでは、よろしくお願いします。



著者によるコメント

大澤広嗣コメント

大澤：卒業生の大澤と申します。本日は、このような場を設けて下さり、大いに感謝を申し上げます。大正大学の先生方をはじめ、今日、拙著の書評をいただく、

高橋さん、小林さん、それにお手伝いしてくださっている学生の皆さん、本当にありがとうございます。

まず、この本を書いた動機でございます。そもそも大正大学大学院で勉強して、博士論文をまとめたのが、2006(平成18)年度です。この当時はどういった研究をしていたかという、戦前・戦中に日本がアジアへ膨張していくなか、中国や東南アジアのイスラームや、満洲や蒙古のラマ教(チベット仏教)、東南アジアの上座仏教など各地にある諸宗教について、宗教研究者が動員されて、日本の統治目的のためにどのように調査・研究がなされていたのかをまとめたのが博士論文です。結局のところ、扱う地域と宗教が広がりすぎて、論点が拡散してしまいました。そのため、博士論文の出版に向けた、着地点が見えませんでした。

そうした中で、拙著が東南アジアに焦点を当てたのは、理由がありました。宗教から見た日本とアジアの関係史において、かつて「南洋」や「南方」と呼ばれた東南アジアが、私の問題意識の中で一番強かったからです。

なぜ東南アジアなのかというと、星野英紀先生を研究代表者とする共同研究(平成15年度大正大学学術研究助成「国際結婚における宗教的・文化的アイデンティティをめぐる諸問題に関する調査研究」)に、弓山達也先生からお声掛けいただき、調査補助のため、タイ、ベトナム、フィリピンに赴き、様々な人からインタビューをしまして、社会調査の手法を大いに勉強させて頂きました。現地では、多くのインタビュー調査を行いました。調査の合間には、現地の宗教事情について見聞を広めました。タイに行ったときは、バンコク市内にある日本人納骨堂に参りました。高野山から派遣された僧侶が常駐していて、日本人の古い遺骨や位牌の供養を続けています。当時の私は、衝撃を受けました。古くから日本と東南アジアの関係は深く、そこには歴史の表舞台には出てこない無名の人々がいたということを知ったからです。

日本人の海外移住と共に、仏教者が追隨していたことは、よく知られた事実です。日本が権益を求めた中国、朝鮮、台湾などの東アジアについては、海外布教研究として知られます。これらの地域は、組織として宗派が関与していたため、まとまった資料が残されており、多くの先行研究が積み重ねられてきました。

一方の東南アジアについては、明治期から仏教者の進出の足跡は認められますが、組織よりも個人の動機で進出していたため、資料も限られており、研究は少なかつたのであります。まとまった主な成果として、中西直樹氏の研究(『植民地台湾と日本仏教』三人社、2016年所収の「附章 南洋布教の概要」)があります。

昭和前期に戦争が始まると、1940(昭和15)年のインドシナ北部への進駐をきっかけとして、南進政策を本格化させます。東南アジアには仏教国が多いのですが、複数の仏教者や仏教研究者を動員して、調査研究や工作活動をさせるのです。調べていく中で、研究史の空白を感じました。日本仏教の対外進出の研究となりますと、東アジアが多いのですが、東南アジアが皆無なので、拙著にまとめた次第です。

私自身の反省ですが、大学院生の方々には、悪い見本として聞いていただきたいのです。つまり、どこかの時点で区切らないと、成果がまとまらないということです。私の場合、博士論文を出してから、出版まで十年弱かかりました。大学院を経て、その後に研究環境が変わり、行政機関に勤めることになりました。その環境ゆえに、宗教団体への見方が変化したのです。大学で学んでいたころは、無意識かつ無自覚のうちに宗教者側の視点で見えていました。しかし行政機関に勤めると、法制度を踏まえて宗教団体に対する見る目が養われました。その後、宗教と国家をめぐる諸問題が見えてきて、結局のところ、欲張ってしまい出版までに時間がかかってしまいました。ですので、院生の皆さんは、あまり欲張らないように、ある時点で区切って、論文を提出するなり、出版をするなりしていただきたいと思います。ひとまず以上です。

寺田：ありがとうございます。それでは続いて、高橋さんに書評をしていただきます。

第1報告

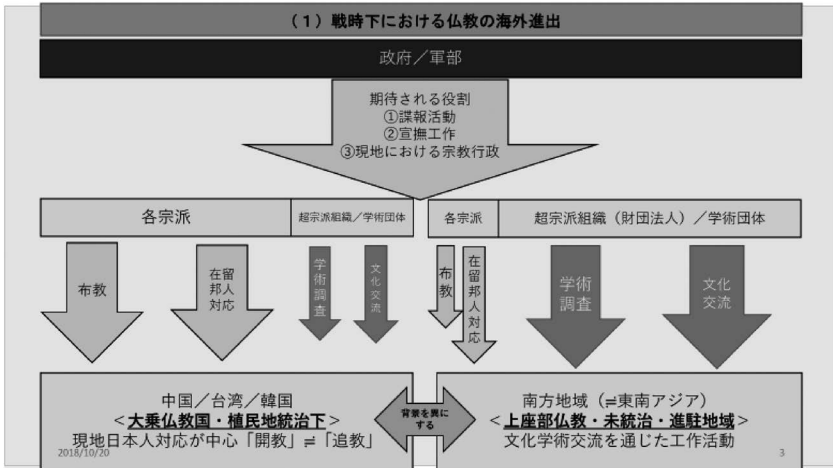
高橋秀慧コメント

高橋：第一報告を仰せつかりました、大正大学大学院博士後期課程の高橋秀慧です。スライドで説明をいたしますが、印刷したものをお手元に配布しておりますので併せてご確認ください。

はじめにですけれども、私は元々近世～近代、幕末から明治・大正くらいまでを対象にした仏教史の研究をしています。今回対象となる南方地域の戦時下の歴史となると、なかなか知識的にも及ばないところがありまして、もし事実の誤認・誤読などございましたら、後ほど質疑の際にご指摘いただけますと幸いです。それでは進めさせていただきます。

まず本書の内容に入る前に、大澤さんからも当時の状況について説明がござい

ましたが、スライドの1枚目で戦時下における仏教の海外進出についてまとめさせていただきました。

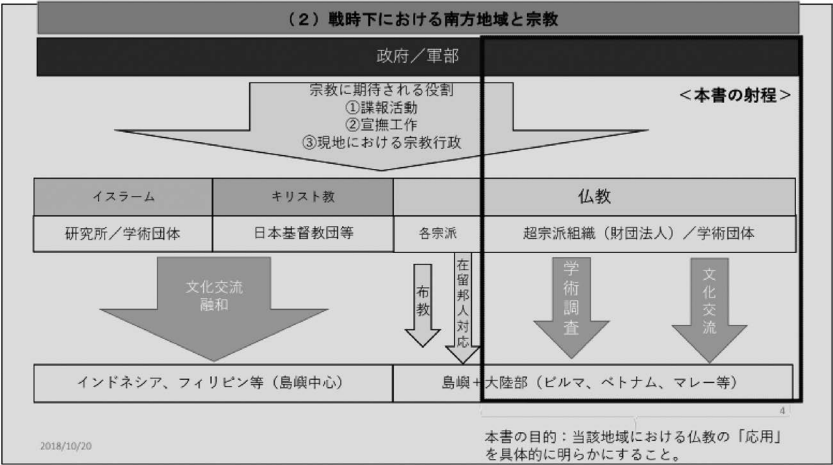


スライドに示したとおり、政府・軍部から宗教に期待される役割は、主に諜報活動や宣撫工作、そして現地における宗教行政がありました。これについてとりわけ仏教では、各宗派単位、超宗派組織、それから仏教を学術的に研究する団体、こういったものが各統治下ないし侵攻地域に対して、様々な対応をしていたことが本書で述べられております。その際に、各宗派では、布教をはじめ現地に入植した日本人に対しての葬儀や法事の執行、そして日々の信仰をサポートするための対応がなされました。それから従軍して戦死した方の菩提を弔う、従軍僧と呼ばれた方がいたことも先行研究で指摘されています。

一方で、本書の中核に据えられている、超宗派組織や学術団体についてですが、東アジアは多く仏教国がありますので、そういうところでの学術調査、それから仏教を共通項とした文化交流、こういったもので統治国との融和を図ろうという趣旨で海外に進出していった経緯があるそうです。その上で、本書を読む際に一番重要なのは、中国・台湾・韓国と南方地域との背景の違いです。中国・台湾・韓国は大乘仏教の国ですし、日本が植民地として統治していた国でもあります。そうした地域では、現地の日本人への対応が中心となり、また布教も、「開教」または「追教」とも言われたりするようですが、宗派が組織した布教師によって進出が図られていました。一方、本書で述べられております「南方地域」、これはニ

アリーイコールで東南アジアとさせていただきますが、東南アジアは、日本や中台韓とも違い、上座仏教の国です。他にも宗教はございますけれども、仏教については上座仏教が中心になります。それから、ABCD包囲網が敷かれる以前は、日本軍が進出していない未統治地域であり、その後進駐が図られた新興の勢力範囲であったということがございます。こうした地域では「大乘仏教」という共通のキーワードがないので、「仏教」という更に大きいキーワードを用いて文化・学術の興隆を通じた工作活動が行われていた。これが本書で重要になってくる点です。

次に、スライドの2枚目で、戦時下における南方地域と宗教ということで話を進めさせていただきます。

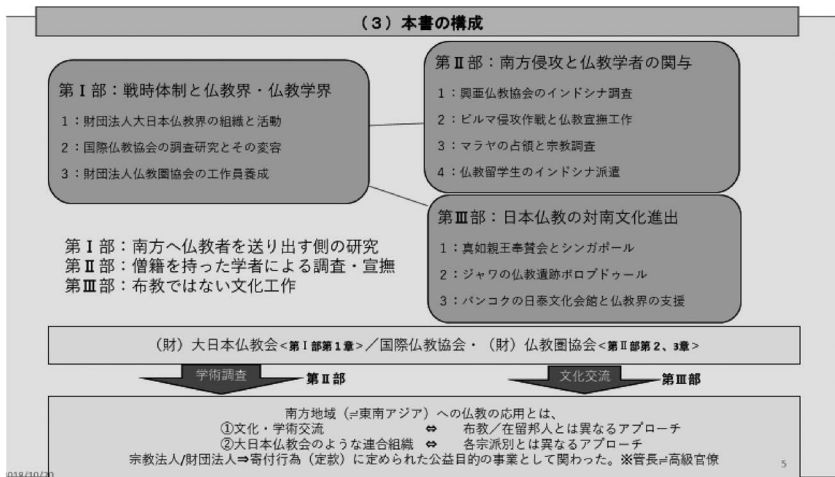


1枚目で図示したように、政府・軍部から宗教に期待される役割は、諜報活動、宣撫工作、現地における宗教行政がありますけれども、これを南方地域に限って照射してみると、イスラームやキリスト教系の学術団体、例えば日本基督教団などが学術調査や文化交流を目的として、インドネシア、フィリピンなどキリスト教やイスラームが主流の国に進出していきます。

一方で仏教はといいますと、先に述べたように、各宗派が在留邦人への対応や布教といった形で進出はしているのですが、割合的には中台韓に比べるとかなり少ない。どちらかという、学術調査や文化交流を目的にした超宗派団体や学術団体の進出が大きかったのであろうというのが本書の見立てです。また、東南アジアの中でも、先行研究で重点的に捉えられているのは、インドネシアやフィリ

ピンなど島嶼部が中心で、大陸部と呼ばれるベトナム、マレーについてはあまり研究がなされていないということも本書で指摘されています。そこで本書では、政府・軍部が宗教に期待した「役割」を、仏教というフィルターを通して、超宗派組織や学術団体が受け止めたこと、そして仏教を通じた学術調査や文化交流という形で、日本が南方地域へ進出していく際に足がかりにしたことの具体的な事例を明らかにすることを、最大の目的に据えます。これを大澤さんは、当該地域に於ける「仏教の『応用』の具体的な事例」としております。

ここでスライドの3枚目、本書の構成に入ります。本書は三部構成になっています。



第Ⅰ部は「戦時体制と仏教界・仏教学界」で、三章立て。第Ⅱ部は「南方侵攻と仏教学者の関与」で四章立て、第Ⅲ部は「日本仏教の対南文化進出」で三章立て。章の分け方は、本書にも書かれておりますが、第Ⅰ部は南方へ仏教者を送り出す側の研究です。財団法人や学会などが中心となって、組織的に人を養成し、南方へ送り出すわけですが、そういったことの基礎的研究がなされています。第Ⅱ部、第Ⅲ部は、そこで養成された人物が、実際に現地でどのようなことを行ったのかについて、具体的な事例としてまとめられています。第Ⅱ部では僧籍を持った学者による調査、宣撫工作。第Ⅲ部は、仏教文化に根ざした文化的な工作活動が事例として挙げられています。本書の構成をまとめますと、財団法人大日本仏教会

に関わるものが第Ⅰ部第一章、それから国際仏教協会・財団法人仏教圏教会に関わる基礎的な情報が第Ⅱ部第二章、三章でまとめられています。その上で学術調査に関するものが第Ⅱ部、文化交流に関するものが第Ⅲ部に当たります。

こうした事例が積み重なった上で、最終的に本書の結論部分ですが、南方地域・東南アジアへの仏教の「応用」とは、まず文化・学術交流です。これは従来、中台韓に日本仏教がアプローチしていった布教・在留邦人への宗教対応とは異なるアプローチです。それから二つ目、大日本仏教会のような連合組織が仏教の応用に機能していた。これも中台韓と比較して、宗派別に行われていたものとは異なるアプローチであると述べられています。こうした超宗派組織・学術団体による文化・学術交流という形での宣撫工作活動ですが、これを著者は、寄附行為(定款)に定められた「公益目的」の事業として関わったとまとめられています。さらに、その根拠として、定款もそうですし、公益目的もそうですが、各宗派の管長が勅任官として高級官僚に相当するような位置づけであったという点も指摘されました。

ここまで本書の概要を述べてきましたが、本書は2015年に刊行されたこともありまして、すでに複数の学会誌において各分野の専門家から書評がなされていますので、併せて紹介いたします。

『宗教研究』は宗教学の西村明先生による書評ですが、「本書は南方地域と日本仏教の関係を考察する上での基礎文献となるばかりではなく、戦時期における政府と仏教界と研究者(仏教学者・宗教学者・民族学者等)の関係、仏教連合組織の発生と展開など、いくつかの方向への展開の可能性」があるモデルであると述べられております。また今後の課題としては、「超宗派的動向をどのように理解したらよいか」ということに関して、著者のまとめた見解が欠けていると、さらに「現地社会や他の海外研究者との協働が必要となる主題」ではないかということも指摘されております。

次に『仏教史学研究』では新野和暢先生、政治学・宗教学をご専門とされる方ですけれども、この方も、本書における情報量ですとか、資料的価値を高く評価しており、当該期の「南方の各地域がもつ特色を浮き彫りにした」ものであるとしています。『大東亜共栄圏』の理想の全貌を明らかにするというのが新野先生の課題のようなのですが、それに「より近づいた」との評価をされています。またコメントとしては、占領地や植民地との比較があるとなお理解が深まったという指摘や、法令上の文言と現地の実態の差の分析を行うことが重要では無いかと

の意見を述べられておりました。

次に『宗教と社会』、宗教学・神道学の菅浩二先生です。菅先生もやはり、新しい知見や資料について「純粹に教えられることばかりであった」、ということをごまざ述べられています。そして、菅先生が述べるころの、いわゆる「戦後」の視点から「戦前」の歴史を解釈した結果なされる「反省」といった「皮相な解釈」とは一線を画し、実証的であると評価されています。その反面課題としては、その史実がいかん解釈されるか、今日的視点からどのように意義付け、評価されるかは前面の問題となっておらず、複数宗派が一括して運動に取り組んだことへの評価やその内実については、もう少し分析を深めた方がよいのではないかと、といった指摘がなされました。

次に『近代仏教』では小島敬裕先生、東南アジア地域研究を専門とされる方です。小島先生は「本書にあげられている事業は、ほとんどが『絵に描いた餅』に終わったといっても過言ではない」としつつ、「このことは本書の価値を下げるものではない」と、その「事実こそ注目すべき」とであると評価をされています。また、本書を受けて、南方の人々からの目線による研究は、小島先生をはじめとする地域研究者の仕事になるとも述べています。加えて、仏教者の活動が軍政府にとって実際どの程度意味のあるものだったのか、という点を深めてはと課題を指摘しています。

次に『日本史研究』では、高山秀嗣先生、仏教学の方です。まず本書の意義として、一次資料に基づき、南方地域と仏教の関わりを明らかにしていることから、今後の研究基盤に繋がると評価しています。また、内容面というよりは内容を理解する上での補足のようなもので、人物関係図が付いていると良かったとか、仏教者個人個人の思想や主義の分析があると理解が深まったであるとか、同時代の国内や他地域の状況に関する説明がもう少しあれば良かったといったことなどが指摘されました。

評者各人の専門・関心から観点が拡散しておりますけれども、本書の課題・成果として指摘された点は、以下の点にまとめられると思います。一点目は、「南方側からみた目線」という点です。これは著者の大澤さんも本書の中で書かれておりますけれども、言語ですとか文化が、東南アジア諸国多岐に渡っていますので、これを一人でやりきることはとても難しい。そこで大澤さんは、まず日本から見た基礎的な研究をきちんと積み上げた上で、後続の研究を待ちたいというようなコメントを出されていたかと思えます。二点目は、「超宗派連合」の評価をめぐる

問題です。本書に出てくる財団法人は、宗教団体法によって強制的に合併させられた宗派のまとまりでありますので、こういった組織の内実が実際どのようなものであったのかについては、もう少し深める必要があるのではないかと指摘がなされました。それから三点目、これは積極的な評価ですが、やはり一次資料や事例の蓄積に厚みがあり、この分野に詳しい方は大澤さんをもって他にいないのではないかとはいくらか、新しい知見であることが大きく評価されています。ここで評者の感想・疑問を述べてまとめに入りたいと思います。

(5) 評者の感想・疑問

【本報告のまとめ】

・日本の戦争とアジア・宗教というテーマ

①宗教学・宗教社会学：開教研究、植民地布教研究

②近代仏教史研究：近代仏教学史、仏教と戦争協力

③地域研究：戦時下東南アジア地域史

⇒ 宗派横断的研究の要請

⇒ 中・台・韓中心の研究動向

⇒ キリスト教・イスラームが先行

／大陸部の研究蓄積の少なさ

【感想】

本書は、上記の学際的研究領域が抱える空隙を埋めるため、貴重な文献資料や遺族への聞き取りなどを用いて幅広く事例の蓄積を行い、戦時下南方地域と仏教の関わりを、日本側からの視点で明らかにするという目的を見事に達成している。本書をテコに東南アジア史研究者らによって、現地の資料を用いた研究が後続することが期待される。とりわけ、評者の関心（人物顕彰と宗教・社会の問題）からすると、真如親王奉讃会の事例は非常に興味深いものであった。階位や祭祀によって「偉人」認定を受けた人物に縁のある場所が、史蹟や聖地として整備され、人物崇敬の「場」が、ナショナリズムの「基地局」になっていくと評者は考えている。国家による文化政策の種が、南方地域でも植えられていたことを示す本事例は非常に興味深い。

【疑問点】

☆1：結論部分、仏教の戦争協力＝公益目的／宗教団体法。という論理

「民法」由来の公益目的事業であるからという理由を前面に出すと、仏教界の主体性の所在が見えにくい？

☆2：[柴田編2018]によると、統治下台湾は南方進出の前線としての位置けられており、本書に登場する久野も台湾帝大の南方人文研究所に所属していた。非占領下地域への侵攻・工作活動の前線として、植民地が機能していたならば、中・台・韓と南方へのアプローチの相違（布教or學術・交流）ではなく、段階（學術・交流⇒布教）と捉えることは可能か？

2018/10/20

7

本報告のまとめとしまして、本書では日本の戦争とアジア・宗教というテーマが取り上げられています。これを学際的に様々な学問分野に落とし込んでみますと、まず宗教学・宗教社会学においては、開教・植民地布教研究に括られると考えます。このテーマでは、個別宗派の事例研究が多く、宗派横断的な研究の必要性が常々指摘されています。次に近代仏教研究ですが、こちらは近代仏教学史、仏教と戦争協力といったテーマに括られると考えます。このテーマでは、やはり中台韓を中心とした研究動向が中心になっていると思います。そして地域研究では、東南アジア地域史に括られると考えます。このテーマでは、キリスト教やイスラームを対象にした研究が先行しており、また大澤さんも指摘されていますが、大陸部に関する研究蓄積が少ないという課題があります。このように、各分野の課題となっている部分について、大澤さんのご研究はそれを克服するための様々な仕掛けがなされているのではないかと感じます。そこで感想ですけれど

も、本書は、上記の学際的研究領域が抱える「空隙」を埋めるため、貴重な文献資料や遺族への聞き取りなどを用いて幅広く事例の蓄積を行い、戦時下南方地域と仏教の関わりを、日本側からの視点で明らかにするという目的を見事に達成しております。本書をテコにして、東南アジア史研究者らによって、現地の資料を用いた研究が後続されることが、今回参照した書評などでも期待されています。

とりわけ、評者の関心に寄せますと、私は人物顕彰と宗教・社会の問題を研究していますので、本書の第三部で取り上げられた真如親王奉讃会の事例は非常に興味深いものでした。

贈位や祭祀によって「偉人」の認定を受けた人物に縁のある場所が、「史蹟」や「聖地」として整備され、人物崇敬の「場」が、(天皇制)ナショナリズムの「基地局」になっていくと評者は考えています。この「基地局」に当たる部分が真如親王の像や記念碑の建設に当たるのではないかと思われました。

そのような意味で、新しく進出した南方地域にも、国家による文化政策の種が植えられていたというように、評者としては読み取れまして、本事例は非常に興味深いものでした。

一方で疑問点を二つ挙げさせていただきます。一つ目は、結論部分でも書かれていましたが、仏教の戦争協力が公益目的であり、宗教団体に規定されているという論理について、「民法」由来の公益目的事業であるから(それを根拠に戦争協力を行った)という点です。この理由を前面に出すと、それに対して仏教界の主体性は実はどこにあったのか、ということがやや見えにくいのではないかと感じました。

それから、大澤さんの最新の論文が掲載されている『台湾の仏教』(柴田幹夫編、勉誠出版、2018年)によると、統治下の台湾は、南方進出の「前線基地」として位置けられており、本書に登場する久野も台北帝大の南方人文研究所に所属していました。非占領下地域への侵攻・工作活動の「前線基地」として、すでに植民地になっている地域が機能していたならば、中台韓と南方へのアプローチの「相違」という捉え方(布教or学術・交流)ではなく、「段階」(学術・交流⇒布教)と捉えることが、もしかするとできるのではないかと思います。この点を質問させていただきます。

大澤さんのご研究の今後の展望についてですけれども、本書刊行後、しばらくは東南アジア・南方地域に関する論文を執筆されておられます。近年は今話しに出ました「台北帝国大学南方人文研究所と仏教学者の久野芳隆」(前掲柴田編所収)があります。それから「明治百年と一九六八年の宗教界」、これは『カミとホ

トケの幕末維新—交錯する宗教世界』(岩田真美・桐原健真編、法蔵館、2018年)という本に掲載されますが、来月発売ですけれども、私も少し書かせていただいておりますので、ちょっと宣伝ですけれど、手にとっていただければと思います。

それから、先日大谷大学で開催されました日本宗教学会第77回学術大会では、「1940年の日本万国博覧会・オリンピックと仏教界」というタイトルで発表をされております、こうした研究の経過を見ますと、国家的な規模の行事と、そのときに対応した仏教界との関わりということに、戦争とか侵略とかにとらわれず、ご関心があるのかなと思います。こうした国家的規模の行事というのは、戦争とは直接関係なくても、国家との関係において宗教・仏教がどのようにあるべきか、ということで、動きが出てきますので、このようなご関心は本書の第三部の延長線上にあるのかなと思います。私の報告は以上です。(当日配付資料のスライドは必要な部分のみ掲載した)。

第2報告

小林惇道コメント

小林: 本日は大澤広嗣さんのご高著の批評をさせていただくという機会をいただき感謝しております。有意義に読ませていただきました。

先ほどの高橋秀慧さんのお話は、大きく全体からの視点でしたが、私からは細かい点を含めて感じたことを述べさせていただきます。

『戦時下の日本仏教と南方地域』(以下、本書と略す)は、著者が博士論文として提出した「昭和前期におけるアジア諸宗教の調査研究活動に関する分析的研究」(大正大学提出、2006年度)を着想の萌芽として、戦時下の南方地域に関わった日本人仏教者を中心に、政府、軍部、学者、仏教界の動向についての事実の発掘と分析を行ったものと理解しています。

まず事実の発掘という点で、本書は大変意義深いものとなっています。著者が「日本影響下の東南アジアに関する研究は、これまで多くの成果が蓄積されてきた。しかし、本書で扱う日本の仏教界による現地への関与について、横断的に着目した研究は、今までに皆無であったといつてよい¹」と指摘していますように、これまでまとまった研究がなかった戦時下における東南アジア地域の仏教界の関わりについて、非常に多くの、そして多様な一次資料を用いて、その全体像を描き出しており、研究史上評価すべき成果となっていると感じます。

著者は宗教学を専門としつつも、歴史学的手法を用いて、一次資料から事柄や事実を丁寧に導き出しています。用いられている一次資料は、多くの雑誌資料、増上寺所蔵の大日本仏教会資料、アジア歴史資料センター所蔵資料、公文書館所蔵資料、議会議事録、入手が難しいと思われる書籍、独自に発掘・整理した資料、軍関係の資料などを様々に駆使して、論を展開しています。加えて、遺族へのインタビュー調査も実施し、その論に肉付けをし、裏付けを増しています。また、本書では多くの人物が登場しますが、注を含めて、人物の説明が大変豊富で、後続の研究にとって、大いに参考となります。

資料を用いる上では、例えば「本書では、随所において、浄土宗大本山増上寺（東京都港区）が所蔵する財団法人大日本仏教会の旧蔵資料を参照した。かつて境内に、同会の事務所が所在したが、一九四四（昭和一九）年九月に財団法人大日本戦時宗教報国会として再編の際に、解散した大日本仏教会の事務資料を増上寺が引き継ぎ、現在まで保管しているからである。資料の目録は、増上寺史料編纂所編『増上寺史料集附巻』（大本山増上寺、一九八三年）における「大日本仏教会」（五二二―五三〇頁）を参照。なお目録は、案件ごとに封筒で分けした資料の標題のみで、内容物の記載はない²と、その資料がどういう性格のものであるかを詳細に記述しており、読者の理解を深めるために参考になります。

本書では一次資料を用いて事実を丁寧に論述しており、大日本仏教会の前身組織について、現在の存続組織である全日本仏教会が認識している史実に誤りがあるという指摘がなされていますが、誤りの指摘は、当該団体にとっても歓迎されるものであるかと思えます³。

本書は、仏教を用いての宣撫工作や文化工作がどのようなものであったか明らかにするものですが、著者が先行研究の整理の中で指摘しますように、キリスト教を用いての宣撫工作の研究はあったものの、仏教を用いての宣撫工作を扱った研究はこれまではなかったかと思えます。評者が管見した先行研究では、フィリピンではカトリック司祭が終戦までに127名動員されたとありましたが⁴、どの宗教を用いるかは、当該地域の宗教事情によるところが大きいでありましょう。東南アジアの多くの国が、仏教を信仰することを考えると、著者が仏教へ着目したことは鋭いと思われます。

なお、政府が仏教を含む宗教者や宗教学者に対して宣撫工作を期待していたことは、小川原正道も「宗教による宣撫工作、といっても、宗教者自身によるもの、宗教に詳しい専門家によるもの、さらには宣撫担当の軍人自身によるものなど、

さまざまであったが、軍や外務省が宣撫工作の一手段として宗教をとらえていたことはまちがいない、それは文部省とも共有された認識であった⁵と指摘していますが、詳細に検討を行ったものではありません。

ここまでは本書を拝読しての感想を述べましたが、ここからは各論で確認させていただきたいことをご質問いたします。

二点ありますが、一点目に、第Ⅱ部第二章「ビルマ進攻作戦と仏教宣撫工作」について、お伺いいたします。ビルマの宗教宣撫班に所属した上田天瑞の「これ等の地域（ビルマ：評者注）の作戦統治の為には、仏教による宣撫が最も有効であろう⁶」という発言に代表されますように、現地を統治するためには仏教を利用することが効果的と考えられていたようです。しかし、日本進駐以前のビルマの国家統治への宗教（仏教）の関与はいかなるものであったのでしょうか。進駐以前のビルマにおける国家と宗教（仏教）との関係、あるいは統治への宗教（仏教）の関与が分からないと、日本統治において宗教（仏教）を利用することの意義が見えないのではないのでしょうか。

また、宗教宣撫班班員の一人であった能勢正信が、「吾々と同じように、宣撫、宣伝の任務を持つてゐるのだ⁷」と述べていますように、本書では南方徴用作家の存在を指摘しています。歴史学者の河西晃祐は、大東亜共栄圏と文化人との関わりを明らかにする中で、「南方徴用作家とは、「大東亜共栄圏」構想を現地の人々および日本軍兵士に浸透させるために、軍政機構において宣伝宣撫工作を担った文学者たちのことである⁸」として南方徴用作家の存在を取り上げた上で、南方徴用作家の研究はこれまで、歴史学や国文学で蓄積があるとしています。こうしたことを念頭におきますと、仏教による宣撫の特徴を明らかにするためには、同じく宣撫、宣伝活動に従事した南方徴用作家など他の要員と比較し参照することも有用ではないかと思えます。

二点目に、第Ⅲ部第二章「ジャワの仏教遺跡ボロブドゥール」についてですが、同章の中でボロブドゥールに関する著述がある者の一人として、「ジャワに別荘を構えた仏教者の大谷光瑞⁹」をあげておられます。浄土真宗本願寺派第22世の大谷光瑞は、大谷探検隊の派遣など、当時の仏教界において重要人物であったと思われませんが、序論の注4・注5（14頁）で大谷光瑞とその側近の南方への関与の先行研究はあげられているものの、詳しい言及がここでは見られませんでした。本書の中で、大谷光瑞や周辺人物を取り上げた方がよかったのではないかと思いますので、すがいかがでしょうか。ただ、大澤さんは今後『戦時下の日本仏教と南方地域 第

二集(仮称)』をご出版予定と伺いました。その中で、大谷光瑞に影響を受けた人物が取り上げられるようですので、より詳しい言及がなされるかもしれません。

次に本書の全体について伺います。全部で四点あります。

一点目に、著者が問題意識をもち、「東アジアの植民地の場合は(略)個別の宗派を主体として進出するが多かったのに対し、南方地域は(略)各宗派による個別に進出ではなく、仏教界の連合組織及び特定の宗派を背景としない各種団体が、政府・軍部との協働により行われたのである」¹⁰として結論づけて明らかにしました東アジア地域と南方地域での仏教界の関わり方の違いに関して伺います。日本仏教の南方への関与は、植民地・占領地といった東アジアへの関わり方が異なると指摘されていますが、その違いは著者も指摘しますように「時期の差異」¹¹が大きいのではないのでしょうか。

日中戦争以後の中国大陆での仏教界の戦時の動きを「皇道仏教」として、一次資料からその内実を明らかにした歴史・政治学者の新野和暢は、「同会(中国天津の仏教連合会：評者注)は(略)よりいっそう国策を意識した政治的な活動へと変化したのは、日中戦争以後であり、その分岐点となったのは宗団法の制定(一九三九年四月)である。(略)日本政府は宗教家による宣撫活動をより効果的に行うべく、集団的な活動を考えていたのである」¹²と指摘しています。著者も「大日本仏教会による日本仏教の南方進出は、日中戦争による中国進出と連続した動きのなかで、理解する必要がある。(略)中国方面においては(略)今後、毎年仏教各宗派の対外事業(寺院や教会の設立、布教師の派遣等)に関する計画については、大日本仏教会興亜局が取りまとめを行うことを定めた。(略)この決定まで、各宗派が個々で中国に進出していたため、現地で競合していたのである。これを問題視した政府が、各宗派を効率よく統制すべく、指導要領を出したのである」¹³と指摘しています。このことを勘案しますと、日中戦争以後においては、中国においても、日本政府としては仏教界に集団的な活動を求めていたと考えられ、当該時期では東アジアへの関与の違いはあまり見られないのではないかと感じます。

二点目に、宗派を統合して国策に協力しやすい体制をとるなど、政府による宗教利用の端緒は、宗教団税法(1939年)の制定だと思われませんが、宗教団税法が南方地域への宗教政策に与えた影響を知りたいところでありました。

三点目に、第Ⅱ部第二章で、「(1942年、ビルマ仏教：評者注)連盟結成の目的は、効果的に統制するため、各宗派に分かれているビルマ仏教の各宗派を連合さ

せることであった(略)軍政監部の指導によって、宗教宣撫班によるビルマ仏教連盟と南機関によるビルマ興国仏教連盟は合同されることになった」¹⁴との記述がありますが、この動きは日本国内での宗派(宗教)統合の流れの中に位置づけられるのかお伺いしたいと思います。

四点目に、当時の南方地域は、「大東亜共栄圏」や「南方共栄圏」として一括りにされることが多いかと思う反面、各章(南方地域各国)で、その特徴に違いがみられると思われます。各章で、横のつながり、あるいは関連性があるのかお聞きしたいと思います。

最後に、本書が東南アジアの日本仏教などの研究に対して与えた影響について述べていきます。

本書が出版された後に著者自身による成果としては、大澤広嗣編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域(アジア遊学196)』(勉誠出版、2016年)があります。同書の目的は、「日本と現在の世界趨勢を築いた過去一五〇年間に東南アジア地域に関わった日本人仏教者の動向を軸にして、仏教をめぐる人と社会、地域間の動態と推移を総合的にとらえること」¹⁵とされています。同書は、文化人類学、建築学、歴史学、宗教学などの研究者が寄稿し、仏教教団や仏教者に加え、新宗教団体や文化人による活動も紹介されています。地域としては、中国南部、スリランカ、インドなど周辺地域も対象とされ、「これらの地域を一連のベルト地帯と捉えることで、近代日本の仏教者たちの活動が見えてくるのである。(略)周辺地域を視野に入れることで、初めて「仏教をめぐる日本と東南アジア地域」が、可視化される」¹⁶とあり、その意義が述べられています。

本書では、第Ⅲ部第二章「ジャワの仏教遺跡ポロブドゥール」の「おわりに」の末尾に、「戦時下の真宗大谷派では「東本願寺南方美術調査隊」を編成して(略)アンコール遺跡の調査を実施した。遺跡は過去の遺産だけではなく、現地で崇拜対象となっている場合もあり、また日本側が保護と調査を行うことで、現地に対する文化の影響力が誇示でき、民心を収攬しようとしたのである。宗教による文化工作を見る際に、遺跡の存在との関わりは見過ごすことができない視点であるといえよう」¹⁷と、アンコール遺跡の調査を実施した大谷派の「東本願寺南方美術調査隊」への言及があり、「東本願寺南方美術調査隊」も宗教の文化工作の面があったと読み取れます。しかし、大澤広嗣「アンコール遺跡と東本願寺南方美術調査隊」(大澤広嗣編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』所収)では、「真宗大谷派は、学術調査という方法で南方進出の拡大を狙ったのである。(略)東本願寺

南方美術調査隊は、日本のアジア拡張の産物とはいえ、その学術的意義は、評価すべき成果である。(略) 戦時体制中で行われたとはいえ、調査隊の活動が仏教教団の戦争協力という問題だけで位置づけることは、その成果を矮小化するものである¹⁸と結論づけています。これは、本書で掲げる「宗教による文化工作」とは違う視点となっているのではないのでしょうか。また、本書でボロボドゥールを取り上げたのは、「手始めに」¹⁹との指摘がありますが、「東本願寺南方美術調査隊」を論述しなかったのは、宗派的ということでしょうか。

また、著者は資料の復刻にも取り組んでおり、以下にあげる①②の成果があります。①龍谷大学アジア仏教文化研究センター「戦時下「日本仏教」の国際交流」研究班・中西直樹(代表)・林行夫・吉永進一・大澤広嗣編『資料集・戦時下「日本仏教」の国際交流【編集復刻版】』(不二出版、2016～2018年)、第Ⅰ期・汎太平洋仏教青年会大会関係資料・全2巻、第Ⅱ期・南方仏教圏との交流・全3巻、第Ⅲ期・中国仏教との提携・全2巻、第Ⅳ期・全日本仏教青年会連盟機関誌『青年仏徒』・全2巻。②中西直樹(代表)・野世英水・大澤広嗣監修『仏教植民地布教史資料集成(満州・諸地域編)【編集復刻版】』(三人社、2016～2017年)。一次資料を復刻し出版することは、後続の研究者が当該資料を利用することが容易になるものです。

さらに著者の研究は、他の研究者による研究にも刺激を与え、あるいは当該研究分野の発展に寄与をしていると思われます。

笹川秀夫「近代仏教の時代のすれちがい—戦前、戦中の日本で刊行された仏教雑誌、書籍にみるカンボジア関連記事—」(『アジア太平洋討究』第31号、早稲田大学アジア太平洋研究センター、2018年、61～76頁)は、「カンボジア側から」²⁰の視点に注目したのですが、これは著者が本書で「主に日本側の資料を用いるため、日本中心の内容となることを予め断らねばならない。そのため、日本の仏教者による現地の民衆との関わりについての言及が少ない(略) まず本書では日本側からの関与の実態を考察することを主眼として、現地側の視点による日本仏教に対する評価や批判については、後続の研究による補完を期したい²¹」として指摘します現地側の視点を含むものであります。

また、大平晃久「南進の「聖地」昭南の成立—戦時下における高丘親王顕彰と戦跡巡拝—」(『長崎大学教育学部紀要』第4号、長崎大学教育学部、2018年、281～291頁)では、「大澤広嗣は、仏教界の動向を中心に戦時中の親王の顕彰について詳細な検討を行っている。(略) 本稿では、日本の近代期の対外意識の「記憶の

場」、すなわち、対外的な記憶に強く結びつけられた場所の一つとして、シンガポールに着目する。そして、シンガポール=昭南における二つの面からなる南進の「聖地」化が、それぞれどのように構想され、現実化したか、またそこに「記憶の場」としてどのような特徴があるか考えたい²²と、著者の研究を意識し、研究を進めているものかと思います。

以上、雑ぱくではありますが、評者なりに本書の意義を述べてきました。本書は、戦時下における東南アジア地域への仏教の関与に関する基礎的研究に位置づけられるものであり、非常に有意義な著作であることは疑いないことといえると感じました。今後も大澤さんの研究のご発展を祈念し、成果を拝見できることを楽しみにしております。これで私からの書評を終わらせていただきます。ありがとうございました。(小林報告の注記は末尾に掲載した)。

寺田：大澤さんからリプライをいただいた後にフロアに開いて、全体討論に入りたいと思います。それでは、よろしくをお願いします。

著者リプライ

大澤広嗣リプライ

大澤：先ほどは、高橋さん、小林さんから非常に丁寧な批評を頂戴いたしまして、本当に勉強になりました。お二人からいくつか、御質問・疑問を頂きました。

まず、高橋さんからの御質問についてお答えさせていただきます。疑問点を二点、頂きました。

第一に「結論部分、仏教の戦争協力=公益目的、宗教団体法という論理。『民法』由来の公益目的事業であるからという理由を前面に出すと、仏教界の主体性の所在が見えにくい？」とありますが、政府の側から当時の仏教界を見たために、主体性が欠けていたことは指摘の通りです。

本書では、宗教界と行政の双方を見ればよかったですのですが、仏教界については、宗教団体法の施行以前は13宗56派あり、施行後は13宗28派に統合されます。例えば、真言宗8派は合同され、合同真言宗になります。雑誌の『六大新報』や『高野山時報』を見ますと、合同後も様々な議論があり、派内の合意形成に苦慮した形跡が見当たります。合同真言宗の一派内だけでこのような状況ですから、各宗派が参画する仏教界、つまり大日本仏教会内の合意形成となりますと、より困難

な状況であったことが想像できます。従いまして、仏教界と行政の両方を見るべきところ、仏教界の状況を踏まえると論旨が拡散してしまうので、拙著では仏教界の主体性には重点を置きませんでした。

そもそも、大日本仏教会は、「民法」という人々の関係を規定した法律に基づいて財団法人になったのですが、仏教宗派の設立の根拠法は、「民法」ではなく、「宗教団税法」になります。興味深いことに、当時の財団法人大日本仏教会の寄附行為（現行制度は定款）を見ますと、仏教宗派の加入に関する条文がないのです。現在の公益財団法人全日本仏教会の定款を見ますと、仏教宗派の加入に関する規定はあります。つまり、「宗教団税法」で認可された宗派は、有無を言わず大日本仏教会に加入するという図式でした。要するに政府は、仏教界には多数の宗派があり、効率よく統制するため、大日本仏教会を使って指導をさせたのであります。

財団法人大日本仏教会は公益法人ですが、当時の文脈における公益、つまり社会のためではあるが、国家のために設立されたと言えます。先ほど申しましたが、政府の側が統制するというだけでは、仏教界の主体性が見えにくいことは指摘のとおりで、今後の研究で深めたいと思います。

この後の小林さんの批評とも関係しますが、大日本仏教会という仏教連合組織は、私は重要な視点だと思っております。どういうわけか、ほとんど研究されていませんでした。

その要因の一つには、仏教界の側では、特定の宗派から見る「宗派史観」があったからです。「宗派史観」に基づき、戦時中は政府に統制させられたとか、戦争に協力させられたとか記述されてきたのです。しかも特定の宗派を記述の基準に据えているため、連合組織へ視野が向かうことは皆無でした。考えてみると、政府と宗派の間には、仏教連合組織があったことによって、政府の施策が仏教界に浸透できたのです。戦争中は、仏具や鐘などの金属供与が行われました。政府としては、全国の8万の寺院に徹底させるため、大日本仏教会に強く求め、大日本仏教会から各宗派・各府県仏教会と支部に、指導がなされるのです。

疑問点の第二ですが、本書の刊行後に公表した拙稿（「台北帝国大学南方人文研究所と仏教学者の久野芳隆」、前掲書）の記述に基づき頂きました。つまり、「統治下台湾は南方進出の前線として位置づけられており、本書に登場する久野も台湾帝大の南方人文研究所に所属していた。非占領下地域への侵攻・工作活動の前線として、植民地が機能していたならば、中・台・韓と南方へのアプローチの相違（布教または学術・交流）ではなく、段階（学術・交流⇒布教）と捉えることは可

能か」との提起です。

南方地域は、開戦前から日本人が多数住んでいまして、僧侶による布教が行われていました。しかし、宗派ではなく、個人の資格で布教が行われていたようです。国策として、日本が南方地域への進出が本格化する直前の時期には、中国での布教に際して宗派の競合があり問題視されたため、中国への布教進出は調整がされました。そう考えますと、南方地域への進出は、学術・交流から布教へは移行していくことが想定されていなかったようです。

これまでの日本仏教とアジアとの関わりは海外布教の文脈から多くの成果が出てきましたが、私は布教中心ではないアジアとの関わりを描きたくてこの本をまとめました。とはいえ布教を無視している訳ではないので、今後の自分の課題とします。

続いて、小林さんの質問にお答えさせていただきます。大日本仏教会の前身組織に関しまして、私の本では全日本仏教会が作成した年史について『全仏二十年の歩み』(1973年)の記述の誤りのみを指摘しました。小林さんが調べたところ、その後に刊行された『全日本仏教会の歩み1957-1987』(同会、1987年)、『全日本仏教会の歩みと展望——財団創立50周年記念』(同会、2009年)にも同様の記述があるということを指摘されましたが、これは私も存じておりました。現在、全日本仏教会のウェブサイトを見ると、「1900(明治33)年、国家の宗教統制に反対して結成された「仏教懇話会」に淵源を持ち」とあり、この誤った記述は、未だに変わっていません。仏教界では、政府の施策に反対した歴史を「正史」にしたいようです。実は、全日本仏教会は、職務でとても御世話になっており、行政の人間が特定団体による「歴史観」を執拗に批評することは避けたかったので、あえて文献一冊からの指摘のみに留めた次第です。

それから、「各論で伺いたいこと」にお答えします。「第Ⅱ部第二章」の「→進駐以前のビルマにおいての国家と宗教(仏教)との関係、あるいは統治への宗教(仏教)の関与が分からないと、日本統治において宗教(仏教)を利用することの意義が見えないのではないか」ですが、これは私が抜け落ちていた視点です。進駐以前、日本がビルマを占領する以前の宗教政策を抑えておかないと対比ができません。

それから、「→仏教による、宣撫の特徴を明らかにするためには、同じく宣撫、宣伝活動に従事した南方徴用作家など他の要員と比較し参照することも有用ではないか」とは、全く指摘の通りで、僧侶に他にも、ジャーナリストや作家、画家に行かせて、現地の状況を見聞させて、記事や作品として発表させました。南方徴

用作家の先行研究は複数あります。その中には、親鸞についての著述がある哲学者の三木清が、フィリピンに行っているのです。

南方徴用作家の先行研究が多数ある中で、仏教の宣撫工作についてはキリスト教、イスラームとの比較には至りませんでした。南方徴用作家については関心を持っておりますので、共通点や相違点は今後に考えたいと思います。

大谷光瑞のことで、私は本を書くなかで、光瑞のことは射程に入っていました。やはり光瑞は著名人ですので、この人を取り上げると、読者の方がそっちに目が行って、歴史から消えてしまった人々にはあまり注目されないの、今回は光瑞のことを詳細には論じませんでした。

宗教団税法について指摘をいただきました。小林さんが述べたなかに、新野さんが指摘の指摘を引用しています。それによると、「同会（中国天津の仏教連合会：小林注）は（略）よりいっそう国策を意識した政治的な活動へと変化したのは、日中戦争以降であり、その分岐点となったのは宗団法の制定（1939年4月）である。（略）日本政府は宗教家による宣撫活動をより効果的に行うべく、集団的な活動を考えていたのである」（新野和暢『皇道仏教と大陸布教——十五年戦争期の宗教と国家』社会評論社、2014年）とのことです。

この点について、私は見解が少し違いまして、宗教団税法は、1939年に公布、1940年に施行されました。その後、同法に基づいて、仏教宗派が1941年にほとんどが統合されます。そう考えると、国内の宗派の調整だけで時間がかかっていたのに、中国への影響というのは慎重に検討すべきではないかと思います。宗教団税法の制定に関しては、戦時的な要請がありました。つまり明治中期に宗教法案が提出されますが帝国議会で否決され、その後に数次にわたり立法の機会がありましたが、いずれ制定に至りませんでした。なぜ、宗教団税法ができたかという、戦争の影響なのです。この時代、宗教に限らず各分野で統制が行われました。宗教団体が多数あるので、効率よく統制するため、宗教団税法ができたのです。ただし適応の範囲は、日本本土のみであり、占領地は適応の範囲外です。法律が施行された後に、行政側は本土で円滑に運用することだけで手一杯であり、また宗派内でも各派が合同して成立したこともあり、こちらも運用に手間がかかっていたでしょう。従いまして、外地で活動する日本仏教と宗教団税法との影響関係については、十分な検証が求められます。

次に、「南方地域への宗教政策に与えた影響」ですが、1941年以降に軍が現地を占領して、軍による行政、すなわち軍政が行われました。宗教団税法への影響は、

全くないといってもいいです。現地の軍政当局は、法律ではなく、様々な通達・通知に基づき宗教に関する行政を行っていました。現地の方では、占領して、治安を安定させて、取りあえずの現地の宗教事情を尊重するなど、被占領者に対する生活環境を調整するだけで時間がかかっていましたので、宗教団体法の影響はなく、現地ではそれどころではなかったでしょう。

それから「日本国内での宗教・宗派統合」ですが、ビルマでは、日本軍の主導で仏教連盟ができました。いくつか仏教連合組織ができたのですが、結局、様々な教えを持つ宗派を一つにまとめたのであまり機能していなかったようです。ですので、「この動きは日本国内での宗派（宗教）統合の流れに位置づけられるか」ということなのですが、日本国内の動きはまったく別物と考えていただいてもいいと思います。

また、「各章（南方地域各国）で、その特徴に違いがみられると思われる。各章で、横のつながり、あるいは関連性はあるか」ということなのですが、当時の宗教対策というのは、各地域を分割して統治した現地軍政当局では、個別に対策が行われていて、宗教に関しては横の繋がりとかは全くないです。各地域によって宗教事情は多様であり、各地域の軍政当局に任せられていたようです。

高橋さんの報告のなかで、拙著の見取り図を丁寧に紹介いただきましたが、日本占領下のフィリピンのカトリック、インドネシアのイスラームに関する宗教対策については、この地域を対象とする地域研究者が調べています。それとの違いは、繰り返しになりますが、現地の状況に応じて、それぞれが対応していたので、宗教に関して統一的な施策は希薄であったのです。

以上で、高橋さんと小林さんからの質問にお答えさせていただきました。私の欠けていた視点を補足の上、指摘をいただき、大いに感謝しております。いただいた課題は、今後の研究のなかでお答えさせていただきます。

私自身の大きな課題が、北進論と南進論の関係です。日本は土地が狭くて、人口も増えていくなかで、明治以降に日本は中国・満蒙などの北へ向かうか、台湾・南洋などの南に向かうかが議論されてきました。いわゆる北進論と南進論です。近代日本史などでは研究されている分野ですが、その議論と仏教界との関係はどうなったのかは、私自身で未着手の課題でございます。私の著作は、昭和10年代の短い時期だけ扱ったため、近代日本の大きな歴史の流れの中での位置づけができませんでした。これは今後の課題でございます。

もう一つ、これは非常に大きな問題でございます。当時の戦争をどう呼称する

のかという点です。私自身はまだ留保にしております。なぜかといいますと、私の研究は、政府の公文書などの一次資料を使っています。一次資料に基づけば、日中戦争を含めた戦争を、1941(昭和16)年12月に、「大東亜戦争」と呼称するとの閣議決定をしているのです。その後、敗戦後に連合国最高司令官総司令部(GHQ/SCAP)が使用を禁じたのですが、日本の独立後は法的効力を失います。この戦争の呼称について、学界では議論がございしますが、「大東亜戦争」、「太平洋戦争」、「アジア・太平洋戦争」、「第二次世界大戦」など、様々な呼称があります。私自身どう表現したらいいのか非常に悩んでいるところで、未だに答えが出ません。つまり、一次資料を使った記述をするならば、「大東亜戦争」と使うのですが、様々な政治的な主張もあり使いづらいのです。「アジア・太平洋戦争」では、日本がアジアを侵略したという本質があまり見えてこないのです。

今後の展望でございますが、これは別紙のとおり目次案で拙著の続編を考えております(附記参照)。まだ完成には至っていないのですが、向こう数年で何とかまとめたかと考えております。高橋さんと小林さんから頂いた課題を踏まえて、研究を進めたいと思っております。

(附記)

同日の応答では、拙著の続編の目次案を資料で提示した。各章の概要を説明したが、確定ではないため本稿では省略する。なお、続編に所載する論文は、拙著の刊行後に公表した下記を加筆修正して再掲を予定している。

「アンコール遺跡と東本願寺南方美術調査隊」拙編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域』アジア遊学第196号、勉誠出版、2016年

「第二次世界大戦下の南方仏陀祭と政治宣伝」『佛教文化学会紀要』第25号、佛教文化学会、2016年

「昭和前期の仏教界とタイ——藤波大圓と山本快龍の視察」高野山真言宗タイ国開教留学僧の会編『泰国日本人納骨堂建立八十周年記念誌』高野山真言宗タイ国開教留学僧の会、2017年

「対外謀略と経済調査に関わった仏教者——近代日タイ関係と佐藤致孝」『宗教学年報』第33輯、大正大学宗教学会、2018年

「台北帝国大学南方人文研究所と仏教学者の久野芳隆」柴田幹夫編『台湾の日本仏教——布教・交流・近代化』アジア遊学第222号、勉誠出版、2018年

「昭南興亜訓練所と南方特別留学生に関与した仏教者——浄土真宗本願寺派僧侶の金谷哲

全体討議

寺田：せっかくの機会ですし、ある意味クローズドの研究会なので、かなり実質的な議論ができるのではないかなと思っています。今日の出席者はほぼ内部の方なのですが、東京学芸大学の藤井健志先生も来て下さっていますので、是非ご意見を伺いたいですし、僕自身もたくさん聴いてみたいことがあります。誰からでも構いませんので挙手をしていただければと思います。

藤井：東京学芸大学の藤井です。今日はお招きありがとうございました。私は暫く研究から離れていて、考えてみると、この前大澤さんにお会いしたのが文部科学省の中でたまたま会ったという感じです。その当時大学の執行部において、研究に費やす時間がほとんどなかったという時期が5、6年ありましたので、私としてはあまり良いコメントはできないだろうなと思いますけれども、この問題に少し関わってきた人間として、多少コメントを述べたいと思います。

それで、幾つか既に書評もまとめられていまして、それほど違うことは言えないと思うのですが、やはり非常に基礎的な研究だということで、感心しました。ここまで一次資料を一つ一つ丁寧に扱って、その当時の様々な状況を描き出すということは、非常に重要な功績だろうと思います。特に、「法的根拠は」とか、先程も「法的効力は」というようにおっしゃっていたのですが、これは恐らく今までの宗教学の研究者ではちょっと欠けている視点です。何かあった場合に、どういう法的根拠に基づいて仏教者が海外に行ったのだろうとか、そういう問題についてあまり研究はされていないような気がします。そこら辺もかなり感心しています。

それから、全体的に取り上げられているテーマで、私はやんわりと否定されているような気がするのですが、東アジアの方を研究していた人間として、東南アジアというのはあまり視野に入れていなかったということもあり、その点でも大変勉強になりました。

併せて、宗派の資料を使うということについての、私は一種の警告かなというように受け取ったのですが、やはり宗派の資料というものが使いやすいか

らとって、そのみに依拠すると、かなり偏った研究しかできない。それは一つの警告というか、警鐘だというように受け取りたいなと思いました。それらを踏まえて、基本的にはご本人もおっしゃっているのですが、仏教の対外進出というものを、仏教団体の側から見るか、それとも行政とか、あるいは国家の側から見るかという、そういう形で意識されていると思うのです。やはり従来、宗派関係の資料が使いやすいということもあって、仏教団体からの研究というのが非常に多かったというように感じています。それで、大澤さんの視点は、非常に重要だと思いました。

ただ、私はこうした仏教と国家との関係を、大澤さんご自身がどのように評価されているのかということ、少し伺ってみたいと思いました。国家と仏教との関係、あるいは国家と宗教との関係の問題ですか、あるいは国家による宗教利用の特質みたいなものです。そういうものを、大澤さんがどのようにまとめられているのかということにかなり関心があって、その辺りの記述があまりなかったような気がするのです。

併せて、これもどこかの書評にあったと思いますが、政府がこういう仏教者をどのように評価していたのか。これは恐らく大澤さんの問題意識の中に入ってくるものだと思います。仏教を利用したいけれども、なかなか仏教者達に伝えづらいつか、そういうことも見受けられるかなと思います。そういうような政府の側からの仏教批判から、こういう問題に仏教を利用する際の仏教評価の問題というのを知りたいと思いました。

あと、79ページ位だったと思うのですが、『宗教公論』や浜田本悠の話が出ていて、そこを見ると、やはりやんわりと、こういう仏教側の戦争協力を批判とは言えないまでも、やや揶揄しているような感じの引用があったように思うのです。そういうものが、やはり仏教界のある部分にあったのだらうと思います。そういうものは、第一部のテーマの中では、仏教界というものが、戦争協力一辺倒ではなくて、戦争協力といってもそれが絶対的に悪いというように思っているわけでは必ずしもないのですけれども、それでもそこで様々な温度差があって、その温度差の中で仏教というのは戦争協力を徐々に関わっていくようになる。その辺りがもう少し検討されるともっと面白いかなと感じました。

それから、ここはもう非常に個人的な感想になってしまい、恐らく大澤さんが本来考えておられた射程距離とはちょっと外れてくるだろうとは思っていますが、私は、戦時中になりますけれども、こういう時期のこういう日本の仏教者達の対

応というものを通して、日本仏教の特質というものをどういう所に見ていくのかであるとか、あるいは日本の仏教者の仏教観、つまり仏教というものが一つの宗教として、アジア、要するに、中国の仏教にしても、上座部の仏教にしても、「同じ仏教なのだ」という「意識」というものは、やはり政府の、言ってみれば戦争協力との関係の中で、初めて浮かび上がってきたもののような気がするのです。そういうものを抜きにすると、やはりアジアの他の仏教とは違うという、「仏教は一つのものだ」という意識があまりなかったというように言えると思うのですけれども、日本の仏教、あるいは日本の仏教者の特質みたいなものを、どのように捉えるのかという点は、恐らく大澤さんの射程距離には入っていないと思うのですが、個人的には関心がある所です。なおかつ、実際に関わっていた仏教者の本音みたいなもの恐らくあって、色々な文章の上では、絶対にそういうことは批判できないと思うのだけれども、その中で、実際の仏教者がどういうように思っていたのかという、本音のレベルというものを捉えるのは非常に難しいとは思いますが、かなり個人研究に踏み込んでやっておられるので、そこら辺の問題というのも、今後できれば知りたいなというように思いました。

それから、先程もちよつと高橋さんが触れていたと思いますが、全体をやはり東アジアと東南アジアといいますか、そこら辺を分けて論じられておられて、基本的には東南アジアの仏教を論ずるといいますか、東南アジアに進出した日本の仏教を論ずるということでした。それで、東アジアの、例えば、中国仏教、台湾仏教、韓国仏教といったものと、東南アジアの幾つかの上座部仏教というのは、確かに違うものではあるのですけれども、私は先程言いましたように、日本の仏教から見ると、やはり中国仏教、台湾仏教、それから韓国仏教というものを一つ下に見ていたし、「自分たちとは違う」という意識をかなりはつきり持っていたと思うのです。そういうような自分たち、つまり日本の仏教とは違うという意識としては、それほど変わりがなかったのではないかという、南方の方の仏教に対して、つまり、ある種の連続性があったのではないかというのが私の感覚で、日本の仏教者からすると、東アジアの仏教にしても、東南アジアの仏教にしても、基本的には自分たちとは違うもので、なお且つ、自分たちが支配すべき仏教だという感覚があったのではないかなというような気がしています。

それから、この中に繰り返し出てくるのですが、政府が繰り返し「宗教が重要だ」というように言っているのです。今から考えてみると、非常に新鮮というか、新鮮というとあれなのですが、宗教が重要だというように、もちろん、宗教利用

の目的においてそのように言っているわけなのですから。宗教というものの政治の中での位置づけというものについて、戦後はかなり重要性が下がっていくように思うのですが、戦争中の宗教に対する政府の目のつけ方みたいなものが面白いと思います。今から考えると、恐らく戦前を通して宗教にそれなりの役割があったのではないかなと少し思っているのですけれども、それが特に戦争中になると、宗教は本当に重要なのだというような所で一気に浮上してきたような気がして。言いたいのは、宗教というものをどのように捉えるかということの変遷、日本の社会とか、あるいは国家の宗教、特に、国家の変遷が非常に鮮やかに出ているなというようなことを多少感じました。

最後に、これは大澤さんの問題では無いのでちょっと気になったので一言、高橋秀慧さんの中に、「開教」とか「追教」という言葉があったのですけれども、私はあの言葉をやはり使うべきではないというように思っていて、開教というのは、何か日本人を相手にしているから開教ではなくて、日本人が追いかけて行ったから追教だというのは、仏教史学者の方でしばしば使っているのは承知していますけれども、そうすると、やはり私はエスニックチャーチの問題、何かが残してくると思うのです。開教というのは、全くその仏教の信者がいない所に開いていくのだという、実はキリスト教的な一つのモデルを使っているのだらうというように思っていて、むしろエスニックチャーチの観点から考えれば、言ってみれば、追教と呼ばれるようなことも基本的には当たり前のことで、これはキリスト教世界でもしばしばある。つまり海外に出て行った人たちの間に、一種のエスニックチャーチとして、元の国の宗教が作られていくのです。そういうことがしばしば行われていた時だと思うのです。それで、開教とか追教という言葉を使ってしまうと、そこら辺のものが見えなくなってきて、何かキリスト教的な、未開の土地に仏教を布教するみたいな、そんなイメージが強くなりすぎるというように私は思っていて、開教とか追教という言葉は、あまり使うべきじゃないのではないかというように、前から思っていたので、本筋ではないのですけれども、付け加えておきます。以上です。

寺田：ありがとうございます。ちょっと色々とお出されたので、今答えられる範囲のことだけ。

大澤：幾つかの御質問を下さりどうもありがとうございます。答えられる所をお

答えさせていただきます。

日本の仏教がアジアの仏教を下に見ていたということですが、やはり東南アジアに対しても、同じようなことを言っていたのです。日本と東南アジアも、同じ積尊のもとにある仏教として連帯感を「演出」するのですが、結局は日本の仏教が優れて、東南アジアの仏教は劣っている評価が大勢でした。特に仏教学者はインドが基準にあるためか、タイではサンクスリット語からの借用語が多いから、タイ仏教は独自性がないと平然と言うが学者も中にはいたのです。

政府側からの仏教者への評価ですが、東南アジアを占領する際には、民心安定のため宗教対策が大事だということで、現地の調査や宣撫工作、軍政に仏教者を動員していたのですが、統治の際には地域全般で宗教を尊重するという、尊重という名の不干渉の立場で、いわば消極策であったのです。それは明治以降の政府と宗教の関係を見ていくと、宗教団体への施策は後回しになっているといえます。帝国議会で否決された宗教法案が、戦争を機に約40年後に宗教団体法として制定されたのはその確証でしょう。行政の側では、宗教が扱いきれないため、結局は後回しになるのです。

浜田本悠の名前が出ましたが、日蓮宗僧侶で宗教学者の浜田が主宰した雑誌『宗教公論』に、私は非常に関心を持っており、宗教界の様々なことが書かれています。浜田の令孫にあたる鶴岡賀雄東京大学名誉教授から、雑誌『宗教公論』の全巻を借用したことがありました。誌面には、政策への批判などの記述もあり、当時の宗教者や学者の本音として参考になります。私の著書では戦争に動員された仏教学者を取り上げましたが、彼らは西洋での海外留学の経験があり、世界のことを広く知っているのに、結局は国策の流れにおもねった人がいますが、そのような人物をどう評価するのか難しいところがあります。現代の視点から見ると、戦争協力をしたと簡単には言えるのですが、当人には様々な葛藤があったことが想像できます。それを裏付けるような資料は少ないですが、当時の宗教者や学者の葛藤を、今後なるべく丹念に拾っていきたいと思います。

寺田：ありがとうございます。それでは他の方でいかがでしょうか。

高瀬：大正大学の高瀬です。大澤さんにはいつも大変お世話になっております。院生時代から大変可愛がっていただきまして、宗務課のお仕事もお手伝いをさせていただきまして、そんな思いで、今日は来させていただきました。突っ込んだ

質問というか、本当の所どうなのですかみたいな所を聞きたいなと思います。これは今回の本の切り口というか、扱ったテーマにも大きく関わってくることなのですけれども、書評の中で、小島敬裕先生かな、南方の宣撫工作というのは、結局は絵に描いた餅で、結実したものが無いということが書かれてあって、当然、宣撫工作がうまくいったか、いかなかったかというのは、幾つも指摘があり、現地の人のお話とか、様子とかを見ないとわからないことですが、大澤さんがそもそも南方に着目した時に、東アジアとは違う何か、この宣撫工作を見ると、こういうことがわかるのではないかなということで取り組まれたのか、その狙い通りになったのか、あるいは、あれ、こんなはずじゃなかったみたいな話なのか、調べてみたら「うまくいったものが無い」みたいな話になっていくのか、先程のお話の中では、丁寧に資料を集めるということをおっしゃっていたので、そもそもそういうことは念頭にないとおっしゃられたらそれまでという話なのですけれども、当初の狙いと、実際に研究を進めていく中で、ズレがどのくらいあったか、あるいは、あった時にこれをどうやって乗り越えたか、後進の研究者にとってはこういうことは非常に参考になることですので、お話できる範囲で構いませんので、お聞かせいただければと思います。

大澤：私が著書で対象にした期間は、1940年代前半の短い期間です。そのため準備をしたものの実現に至る途中で敗戦となり、著書の中で描いたのは指摘の通り、「絵に描いた餅」でございます。つまり、物事の結論は分かっており、何も実らなかったり、成就しなかったことは、最初から分かっていました。

しかし、仏教界では、国策協力の思惑や政府との利害関係、現地に行った多数の仏教者がいたのですが、著書で歴史から消えた人を掘り起こすことが念頭にありました。結論が「失敗した」、「何も実らなかった」だと、その人々が浮かばれないでしょう。戦争協力という一側面だけを取って断罪の評価を下さすことは、私は避けるべきだと思います。

結局、日本の南方侵略は、本当に無謀で、にわか作りの対策であり、そこに仏教者が動員されるも、成果を見ることなく、敗戦を迎えるのです。先行研究では、東アジアでの実際に成果があった例を取り上げているのもありますが、戦時中の東南アジアでは、ほとんどうまくいってないとはいえ、そこに色々な仏教界の人間模様があったのです。政府と仏教界の関係を描きたいと思い、著書をまとめた次第です。実際に書いていく中で、「こうではなかった」というのはあまりなくて、

最初から分かっていました。

結論をうまくまとめるため、制度史的なアプローチを取りました。先程の藤井先生のコメントにもありましたが、戦時中の動向を取り上げた研究を見ますと、活動の実態などの中味は押させているものの、その背景にある戦争動員の法的な根拠が欠けているものもあります。

制度史との関係ですが、著書では中味の評価が薄いという批判があるでしょう。仏教団体に対する評価ですが、私の今の立場では、なかなか難しいです。特に、1996(平成8)年の宗教法人法の改正以降、宗教界と行政の一部には、いまだに緊張関係があります。私は研究者として奉職していますが、個人の立場で書いた著述でも、恣意的に切り取られて、行政の発言として捉えられかねません。実は、ある共同研究に、私が個人的な立場で、かつ公的な研究費の支出を受けない立場で協力を示したところ、宗教界の一部から大いに懸念と心配が起きたことがございました。宗教団体を学術的に調査するもので、個人の立場での参加でしたが、国家が介入してきたという意図せぬ誤解を与えてしまったからです。

従いまして、活動の中身についてなかなか評価しづらい所があります。制度史という公になったものを並べて、評価の中身は極力避けたかったのです。読者にとってみれば非常に硬く、面白みのない記述になってしまいました。

高瀬：すごすご苦労されたんですね。ありがとうございます。

寺田：それでは僕もしゃべっていいですか。すみません。短めにしたいと思うのですが。まず、この本はとにかく勉強になることばかり。知らないことをたくさん教えていただいて、本当に勉強させていただいた。それと、実証的というか、手堅い。一次資料をたくさん集めていて、今後の研究者にこうした基礎資料を提供するということに対しても、模範的、習うべき姿勢というか、業績だなという感じで、とてもリスペクトしています。さすが大澤広嗣、という感じの仕事だと思っています。

それと、せっかくこういう機会なので、ちょっとチャレンジングというか、ちょっと批判的というか、そういうようなスタンスでコメントすると、やはりこれだけのものを集めてきたのだけれど、何か読み終わった後に結論を読むと、それは今大澤さんが言っている通りで、調べなくてもわかったことです、みたいな感じの結論になっちゃうというか。結局、「南方地域がいわゆる東アジアに比べて

やられていないからやりました」、それから、「宗派史観の宗派の資料を使ってやられているからそれ以外の資料を使ってやりました」、「キリスト教とかそうのはやられているけれども、仏教はあまりやられていないからやりました」っていう、つまり、やられていなかった所をやったことによって、何ができてきたのかっていうことを、是非次作の所で簡単でいいので、やはり「こういうふうなことをやったからこそ見えてきたことはこういうことなのです」というようなことを、読者に仮説的にでも提示していただけたら、読み応えが、喉ごしすっきりになるのではないかなという感じがするのが感想です。

あと、社会学は、必ず「理念」と「利害」というような、ウェーバーのことをいつも言うのです。理念としては、仏教というのはアジアに共通していて、仏教者も同じ仏教国だから貢献できるはずだ。だから、宣撫工作だとか色々なことに貢献すべき、することが可能なのだ、みたいな理念。それと、人が動く時には、必ず利害が働くと。その利害っていうのが、我々の動機とか、あるいは本音というように言い換えてもいいのかもしれないのですが、それも、どのようにつかまえるか、みたいな問題があって、一つは、行動主義者からの仏教批判です。とにかく、浄土とか何とか言って、死んだ後に何か別の所に行くことを言っているような仏教が、今でも戦時下なのに、こんな大手を振っているような、そんな状況なのはおかしいみたいな批判が世論として結構あったわけじゃないですか。そういうものに対抗するための社会貢献だとか、国策従事とかいうような構図であったりとか、あるいはそういうように見られやすいかもしれないけれど、そこには全く別の動機が働いていて、若い仏教者達の立身出世だったりとか、あるいは研究上の野心であったりとか、あるいはロマンチズムとかいうか、オリエンタリズムとかいうか、そういうふうなものの方が大きいのだかっていうような感じで論を張る。

そこに関しては、先程小林君の発表であったみたいに、林芙美子さんとか、当時たくさん小説家とかいうか、文芸の方々が、南方に行ったわけです。そこは、ほとんど何とかいうか、ロマンの方が勝っていたのではないかと僕は見ていますね。そういうような方々と、資料が違うのでうまく描けないかもしれないのですが、そういうような先行研究がある所の分野、とりわけ国文学とか日本文学とかで、たくさんやられていると思うのですけれども、あっちの方で書いているようなことが、彼ら仏教者は日記として残していないとか、あるいは何か戦後の改造においてもこういうふうなことは語っていないとかって言ったら、これは文学者

たちと動機は違ったのだとかがって言えるとか、何らかのストーリーをちょっと、これだけ手堅い資料があるのだから、仮説的にでも言ってくれと、よりコントラバーシヤルというか、論争的になって、読者も増えて、関心が集まって、またさらに研究がワンステップ進むのではないかなと。何か今のままで、歴史学、仏教史学の中に留まらせておくには、ちょっともったいない仕事じゃないのかなと僕は思っているのですけど、そこら辺に関してちょっとご意見いただければと。

大澤：御指摘ありがとうございます。結論として、「調べなくてもわかるのではないか」ということです。結局の所、仏教者の戦争協力というのは、今の仏教者側からの視点でみると「戦争に協力させられた」となるでしょう。先程、申し上げましたが、私が明らかにしたかったのは、やはり仏教者側に戦争協力の温度差があり、政府側の視点から制度史を見た動員の経過なのであります。

話はそれますが、例えば、戦前に政府は「ひとのみち」や「大本」などの宗教団体に対して弾圧したと記述されます。これは紛れもない事実ですが、仏教界でも政府に協力していたのです。当時の中外日報を見ますと、自分たちの權益を守るために、仏教者が政府に協力して、類似宗教の団体を批判しているのです。仏教団体は、政府から統制を受けていたにも関わらずです。しかし戦後以降の仏教界は、この点において、政府からの「被害」を繰り返し言い続けても、他の宗教団体に関する「加害」は発言を慎んできたでしょう。つまり、戦後以降の視点では、仏教者側からの発言が勝ってしまって、政府と仏教界の相互関係が見えてこなかったのです。指摘の通り、そこから何が言えるかといいますと、やはり双方で見る必要があるかなと思います。

この視点は、私が学生時代には気が付かず、今日の仏教界からの視点と論理で、無自覚に研究をしていたと思います。しかし行政機関に勤務するようになってから、仏教界を動員した政府側の視点に、努めて意識するようになりました。「結局は南方地域に行って何もなかった」という結論になっても、私は、その相互関係を描いてみたかったのです。

確かに、拙著は読み物として物足りないということは、指摘のとおりです。先程の繰り返しになりますが、やはり自分の立場上、仏教界に対する評価など中身をあまり言えませんし、資料を無視して大きく飛躍した結論は、私自身の研究手法には合いません。やはり読み物として読む場合に、読者は大きい議論があった方が良いと思われるかもしれませんが、大きい所になると、やはり話の結論が、

「仏教者が政府に協力して南方に行ったが、結局は失敗した」などとなってしまおうでしょう。それだけでは言い足りないので、一次資料を使って、当時の施策を書いたのです。やはり戦争がテーマだけに、当事者の子孫がいるため、読み物として描きづらいと思うのです。

例えば、文学研究の分野では、南方徴用作家の研究は結構ございます。仮に、戦争協力を批判した評価でも、遺族やその作家の愛好者が、よく思わないだけでしょう。しかしながら、仏教者の戦争協力を批判すると、その所属宗派の方々にもまで影響を与えるのです。特に現在、私は公務員で、宗教法人の事務担当なので、「ならば政府の戦争責任は」などと問われかねず、議論が平行線になるでしょう。ですので、なかなか大きい話というのは、行にくいのが正直なところですし、むしろ生産的な議論をするためには、綿密な一次資料に基づいて、当時の政府と仏教界の相互関係を再構成するしかないのかなと思います。もし私が民間人になったら、大きいものとして描けるのですが、言える立場にないので、読み物として読みづらくなってしまったかと自省しています。

寺田：現状の利害の問題もありますからね。鈴木宗憲さんとか、渡辺榎雄さんとか。大澤氏に教えてもらった、新宗教研究者の渡辺榎雄も、読んで面白くて。宗憲さんは生長の家への批判をバンバン書かれて、他の人があまりこだわらない時期に、生長の家への悪口があんなに出るのが、これを読んで結構ストンと落ちた所もあって、そういうのも少し言及して下さったら面白かったかなと。他の方でいかがでしょうか。

星野(壮)：大正大学の星野です。今日のご発表ありがとうございました。書評者のお2人のコメントも、聞いていて大変勉強になりました。

それで、今の寺田先生のコメントの中で、理念と利害の一致や構造主義など、色々なお話があったのですけれども……ただ私も研究者と宗教者で、しかも血縁が出ているということで、はっきり言って禁欲的な書き方をあえてされているというのを読んでよくわかったし、そして近代とか、例えば、それこそナショナリズムとか、そういったことを極力避けている道というのが、むしろ逆に、ほとんど感想レベルなんですけど、痛いほど読んでよくわかるし、これだけ一次資料を並べられたら、はっきり言って仏教の逃げ道が逆になくなるのです。ですから、ひょっとしたら、ちょっと読み込みと解釈によって仏教者も、これだけ布石を

打っていたらもう我々にとっては逃げ道がない、要は、仏教者は喜んで参加したのでしょうという結論しか出てこないと思うのです。なので、この執筆はとても凄いなというように私は思っていましたし、あとは、小林さんのコメントにもあったし、どなたかのコメントにもあったのですが、現地側の状況がわからないと、細かくカンボジアの仏教で、それまでどういったことが現地で行われていたのかとか、現地側の対応がどうだったのかは、ないものねだりに近くて、はっきり言ってもうほとんど大澤さんの視角から言えば、こういった話ってというのは、そもそも射程外ですよみたいな話なので、ちょっとこれはやり過ぎというか、そもそも大澤さんの射程を外れたところから言っているような批判なのではないかなと思って。それは大澤さんの方のコメントで十分じゃないかなというように思っていました。以上の項目で全てですけれども、一応はコメントもしないということで申し上げました。以上です。

寺田：これは大澤氏への仕事というよりは、やはり何か、イギリスとオランダとフランスの宗教政策の違いみたいなことが簡単に注にでも触れられていると、何ていうか対占領政策の入り方の違いとかも、結論の部分と絡みで面白かったのではないかなと僕も思ったのですが。ただこれは、大澤氏のお仕事の本領からは外れる……

星野：ですから、それは別に、ちょっとないものねだりとはわかっていながらも、小林君も言ったのだらうなとは思ったのですが……

大澤：私の著述は、もちろん自分が属する宗教研究の研究者を想定して書いたものでありますが、やはり東南アジア地域研究の研究者にも読んでもらいたいと思って著しました。実際、日本におけるアジアの地域研究は、戦前の研究蓄積を切り捨てて、戦後は欧米流のエリアスタディーズを移入して始まったのです。切り捨てたのは、戦争と統治を目的に生産された研究成果だったからです。例えば、戦時中には東南アジアに関する民族誌が多数発行され、英語などの外国語からの翻訳もあり、たくさん蓄積されていました。当時は「回教研究」と称したイスラーム研究も、同じ状況でした。現在のイスラーム研究は、中東地域の政治からの文脈で重視されていますが、過去に日中戦争以降は、日本にイスラーム研究ブームが起き、複数の研究機関ができました。戦争以降、イスラーム教徒がいる中国を

占領したので、統治のために軍が重要視したのです。にわかには注目された研究分野であり、大学では専門の課程がなかったため、本来のイスラーム研究者は少なく、他分野の優秀な若手研究者が動員されたのです。しかし戦争を機にできた拠点と成果であるため、日本のアジア研究というのは、戦後から再出発しており、20世紀後半の学界では、過去の研究史を無視していたのです。結局戦争におもねって、協力したから価値がないという評価もありますが、戦争目的に動員された研究者が存命であり、その弟子達も指導教員の過去を触れないことが研究作法であったので、全部切り捨てられていました。私は地域研究者では無いのですが、あえてこの本と書いた次第です。付け加えますと、私の修士論文は回教圏研究所という戦争に関わったイスラーム研究を述べたもので、本書での問題意識は、連続しております（概要は、「昭和前期におけるイスラーム研究——回教圏研究所と大久保幸次」『宗教研究』第341号、特集「イスラームと宗教研究」、日本宗教学会、2004年）。

指摘があったカンボジア地域研究の笹川秀夫氏からのコメントもその通りです。私自身は、問題を提起したという認識です。笹川氏のような専門家から見れば足りない部分が出てくることは十分に承知しております。戦後以降の地域研究者が無視してきた諸事実を、丹念に拾い上げ、時代の文脈に再定置するのが、私のささやかな仕事だと思っております。私自身が、見取り図を示すことで、その後続く東南アジアの地域研究者が、過去と現在を繋ぐような研究を続けて、深めてもらえれば私としては非常にありがたい限りです。

やはり、拙著で対象にしたのは東南アジア全域です。これらの地域を研究するのは、旧宗主国の言語（英仏蘭語）と現地の言語が必須で、さらに華人がいますので、中国語の普通語（北京語）と移住者が話した広東語や閩南語などの素養が必要です。これらの言語を均等に使うことは無理なので、拙著では日本側の視点で、日本語の一次資料を中心に使った次第でございます。現地側の視点に基づく研究は、各地域を研究対象とする地域研究者による成果に期待します。

魚尾：ありがとうございます。大正大学大学院博士課程の魚尾です。貴重な本を読ませていただいて、私事なのですが、昨日、先程開教という言葉がどうなのかという言葉があった中で大変難しいですが、ハワイの浄土宗の開教というテーマについて博士論文を書いて、提出をさせていただいたので、色々な所にドキドキしながらお聞きしていました。

2点程聞きたいことがあるのですが、国際仏教協会の所なのですけれども、こちら辺1940年頃に、協会の活動が大きく転換されたということが70ページの所に書かれていたりするのですけれども、戦前のハワイ仏教を見ていくと、仏教の経典に失望して嫌になってきた仏教者たちが、南方に向けたっていうように、僕はそういう文脈から見えてくるのです。国際仏教協会の名簿が確か載っていたと思うのですが、そこら辺の所を見ると、環太平洋仏教青年会とかに関わっていたりとかする人たちも当然重なっているし、なお且つ、仏教当然で、ハワイとアメリカ大陸に行こうとしていた、ある種国策というか、日本仏教が上にあるみたいな、若干そういう立場で見ていた仏教学者だったり僧侶たちが、所謂アメリカナイズドされた2世達の態度というものに対して、何か失望していたみたいなきき方をするような部分もあるので、何かそれに対して、やはり同じ仏教の、支配しやすいという言い方は悪いのですけれども、下に見やすい南方仏教というのは、小乗仏教みたいな感じの所に転換点があったのかなというような、ちょっとそれは、あくまで僕が類推した程度の話なのですが、そういうものがあつたのかどうかというのをお聞きできればなと思いました。

あと、宗団法の話なのですが、何か開教政策でいくと、宗団法の所で、日蓮宗と曹洞宗、浄土宗と本派本願寺って、開教区制度に関して、全く同じ文章をそのまま書いてあるのです。ほぼ同意、同文みたいな感じで、1941年から43年にかけて、宗制、宗派の制度を全部変える時に、同じような文章になっているのです。そういう所に書かれているのは、南方の話は一切開教区としては出てこないというのが共通していたりするので、何か僕からすると、最初、南方というのが開教区の延長線上として見て話があるのかなと思ったのですが、そうではないという、読んだ時に、なるほど、そうなのかというように思ったのですが、これは、あえて宗派側が、そういう所から、宗団法の影響なのかもしれないですけど、外した上で、南方というのは国の政策に乗っかって、国の機関に則ってやるから、宗の制度にはのっけないよというような感じのものだったのか、それとも民間レベルからだんだん国策といいますか、そういうものに乗っかっていくというようなものだったのか、どういうルートで南方に行くものがあつたのか、僕の場合だと、どちらかという、宗派の制度という所から見ている所があるので、何となくその点が気になりました。

大澤：ハワイへの日本人移民1世が失望して東南アジアに向かったとのことす

が、私の研究ではハワイが視野に入っていませんでした。確かに、ハワイで布教する仏教者は、英語が話せる人が派遣されていました。自分の研究に引き付けますと、日本が占領したイギリス領のマレー、シンガポールでは、派遣された仏教者を見ますと、英語が使えた人材が動員された形跡がございました。ハワイとの関係につきましては、今後に注意して見ます。

それから、宗教団体法に基づく宗制ですが、文部省は1941(昭和16)年3月に、ほとんどの仏教宗派の設立を認可したのですが、まさに東南アジア占領地を拡大する前です。その前の1939(昭和14)年に、中国大陸での行政を所掌した興亜院では指導を行いました。その指導とは、中国の占領地に進出する仏教宗派について、仏教連合会(大日本仏教会の前身)が取りまとめて、政府である興亜院に伺いを立てるといった意思決定の手順がありました。その影響から、以降の占領地において日本仏教の進出は、自由な布教はできず、活動の制限があったわけのです。だから、浄土宗宗制の中に、南方南洋開教区という文言がなかったのは、この事情があったからです。

それから、各宗派が文部省から認可を受けた宗制には同じような文言があるという点は、重要な指摘です。当時の文部省は、監督権限がかなり強かったのです。宗制の認可を受けないと宗教活動ができなかったので、仏教宗派は、かなり妥協したのです。その宗制の雛形は、文部省の方で用意したので、各派の宗制が類似したのです。各派は、文部省が用意した雛形の規則に基づき、後は各派の個別事情に応じて、規則の細部は変えたのです。

宗教団体法で認可を受けた、各宗派の宗制を読み込んで、比較する必要があると私自身は思っております。宗教団体法の先行研究については、立法過程の分析がありますし、キリスト教界における実際の運用については詳細な研究がありますが、それに比べると仏教界は少ないので研究が必要でしょう。

寺田：ありがとうございます。それでは閉会の辞を村上先生をお願いします。

村上：最後に、あまり長くならないようにしたいと思います。今日は、登壇していただいた3人の他、わざわざ藤井先生にも来ていただき、大変ありがとうございました。

僕は太澤さんから本を貰って、パラパラッと見たので、そういうことをいうのは生意気なのかもしれないですけど、読んだ時の印象が、何か寸止めを食らった

感じが少ししました。これだけ書いているのだから、何かが最後にくるといいのかなと思ったのです。今日の高橋君の結論の中で、色々な所に関わる研究だと話があって、書いた本人は、やはり最終的には何かを知りたいと思って本を書くものだと思うので。大澤君の今日の話聞いて、「話が非常に広い中で、うまくまとまらなかったのだけれども、宗務課に行って見方が変わったので、こういう本になった」ということがわかりました。特にイスラーム研究の話聞いて、戦前からそういうようなことっていうのはあったのだけど、それが戦争協力というレッテルを貼られると、歴史の闇に葬られてしまう。そういう歴史の闇に葬られてしまったようなものっていうのを、発掘するというのが、これから行われる研究のためには重要なのだ、みたいな話っていうのが発言としてあったので、今日の話で腑に落ちたっていうか、それがやりたいことだったのだというのがわかった。

今日のコメントの中でもありましたが、もし大澤さんが民間人として研究することになると、重要になってくるのは、戦争をどういう名称で呼ぶかっていうこと。今これは保留されているという話があって、つまり、さっきの話っていうのは、仏教界が戦争をどう見ているからこういうやり方になる、イスラーム研究をやっている人たちが戦争をこういうように見ているからこういう扱いになるっていうような話だと思うのです。その時に、この戦争をどう評価するかみたいな話が、戦争中に行われていた研究をどう評価するかっていう話と繋がってくるのではないかな。

二部（次作）があるという話で、今日、こういうことをやったらいいのではないかっていう意見はたくさん出ました。どうするかは大澤さんが決めることだと思うのですが、僕としては、保留になっている大澤君の戦争評価を読みたい。次が出たらというようなことです。

註

- 1 4頁。以下、単にページ数を記載の場合は、本書（大澤広嗣『戦時下の日本仏教と南方地域』（法藏館、2015年））のものとする。
- 2 52頁（注12）。
- 3 著者は、全日本仏教会の二十年史（財団法人全日本仏教会内“全仏二十年の歩み”記念誌編集委員会編『全仏二十年の歩み』（全日本仏教会、1973年、8頁））の記述に誤りがあると指摘しているが（53頁（注15））、評者が確認したところによると、その後の三十年史（財団法人全日本仏教会編『財団創立三十周年記念誌全日本仏教会の歩み1957-1987』（全日本

- 仏教会、1987年、6頁))と五十年史(財団創立50周年記念実行委員会『財団創立五十周年記念全日本仏教会の歩みと展望』(全日本仏教会、2009年、79頁))においても同様の記述があり、同会ではその認識が変わっていないようである。
- 4 小川原正道『日本の戦争と宗教1899-1945』(講談社、2014年、166~167頁)。小川原は、西山俊彦「カトリック教会と天皇制—超国家主義への屈服と十五年戦争への加担—」(富坂キリスト教センター編『十五年戦争期の天皇制とキリスト教』新教出版社、2007年)を参照して記述。
 - 5 小川原前掲『日本の戦争と宗教1899-1945』、168頁。165~168頁「宣撫工作の展開」の項目にある。
 - 6 180頁(上田天瑞の発言)。
 - 7 182頁(宗教宣撫班班員の一人であった能勢正信の発言)。
 - 8 河西晃祐「「大東亜共栄圏」と文化人」(『帝国日本の拡張と崩壊—「大東亜共栄圏」への歴史的展開—』法政大学出版局、2012年、194頁)。
 - 9 310頁。
 - 10 369頁。
 - 11 369頁。
 - 12 新野和暢『皇道仏教と大陸布教—十五年戦争期の宗教と国家—』(評論社、2014年、236~237頁)。
 - 13 39頁。
 - 14 196~197頁。
 - 15 大澤広嗣編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域(アジア遊学196)』(勉誠出版、2016年、4~5頁)。
 - 16 大澤編前掲、『仏教をめぐる日本と東南アジア地域(アジア遊学196)』、6頁。
 - 17 323頁。
 - 18 大澤広嗣「アンコール遺跡と東本願寺南方美術調査隊」(大澤広嗣編『仏教をめぐる日本と東南アジア地域(アジア遊学196)』勉誠出版、2016年、238頁)。
 - 19 323頁。
 - 20 笹川秀夫「近代仏教の時代のすれちがい—戦前、戦中の日本で刊行された仏教雑誌、書籍にみるカンボジア関連記事—」(『アジア太平洋討究』第31号、早稲田大学アジア太平洋研究センター、2018年、62頁)。
 - 21 7頁。
 - 22 大平晃久「南進の「聖地」昭南の成立—戦時下における高丘親王顕彰と戦跡巡拝—」(『長崎大学教育学部紀要』第4号、長崎大学教育学部、2018年、281頁)。